

戦隊ヒーロー

戦隊ヒーロー、おっぱい様に完全敗北!

おっぱい様の完全敗北!



男はマゾい～わ  
いますでいぱい  
♡ ますちやい  
お食べ





エイファ

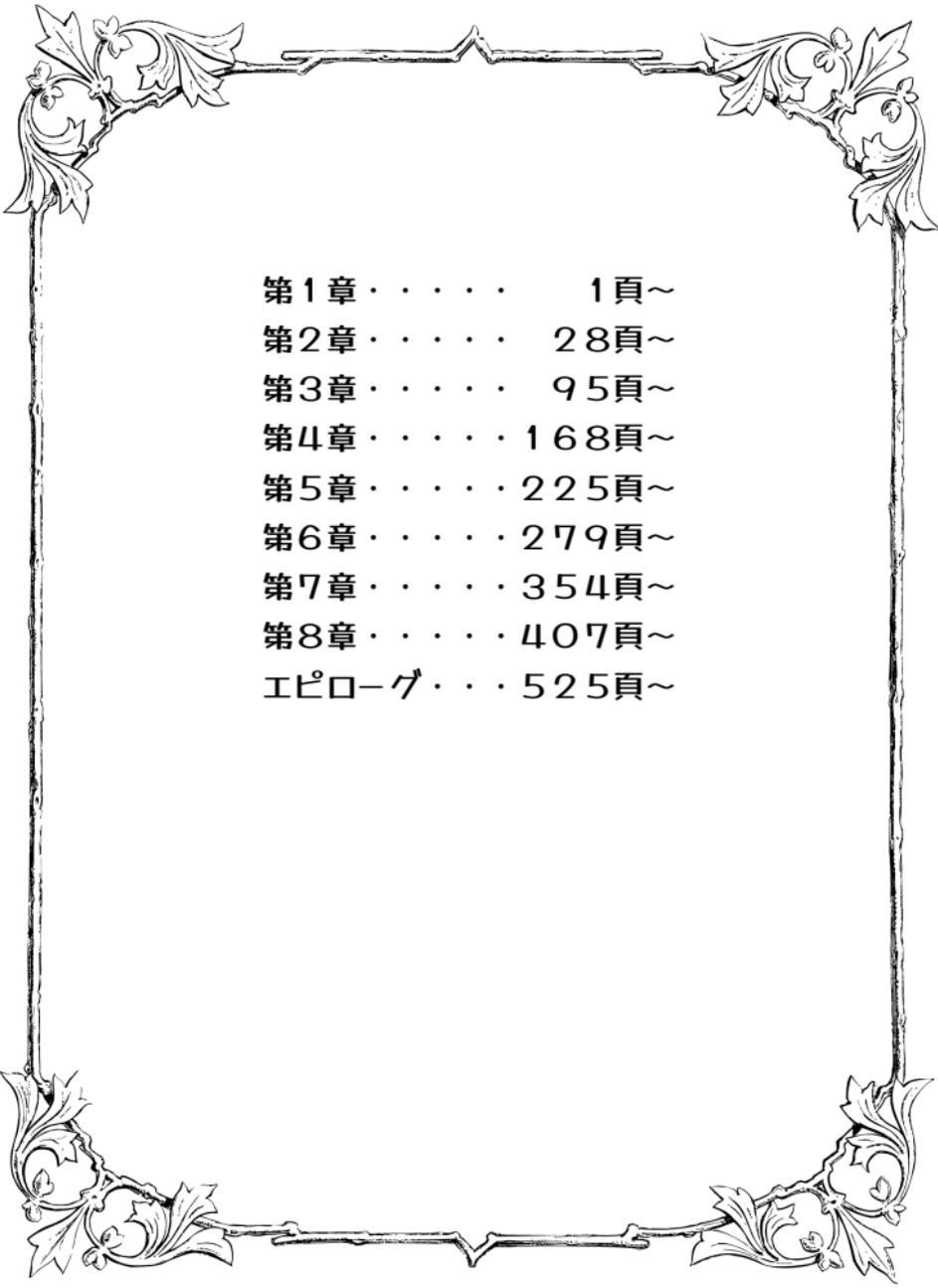


ティファ



比奈



A decorative border with floral motifs in the corners and a central horizontal line with a small notch.

|       |       |
|-------|-------|
| 第1章   | 1頁～   |
| 第2章   | 28頁～  |
| 第3章   | 95頁～  |
| 第4章   | 168頁～ |
| 第5章   | 225頁～ |
| 第6章   | 279頁～ |
| 第7章   | 354頁～ |
| 第8章   | 407頁～ |
| エピローグ | 525頁～ |

## 第1章

### 世界同時多発危機。

文字通り世界の危機が同時多発的に発生する事象のことだ。

そして、「世界の危機」もまた文字通りの意味だった。

——宇宙のかなたにある水蛇座の星から宇宙人が地球に攻めてきて人類が滅亡に瀕するという危機。

——地中深くで眠っていた古代遺跡が活動を始め地球から陸地を消し去ろうと脈動を始めてしまったという危機。

——タイムマシンを開発した未来人たちが時代の転換点を制圧しようとして現代にタ

イムトラベルしてきて新たなディストピア世界を構築しようとする危機。

ありとあらゆる危機が、同時に、多発的に発生するようになって、それが終わらなくなつた。

単一の組織が無限に発生する敵の相手をすることは不可能であり、だからこそ、世界ヒーロー協会の統制のもと、複数の組織が立ち上がるようになった。たった一つの敵対勢力に負けるだけで人類は滅亡してしまう。ヒーローたちは、定められた敵との戦いで常に勝利が求められてきた。

そんな世界同時多発危機が発生してから、かれこれ100年あまりが経過しようとしている。今日もまた、ヒーローたちが人類

の存亡をかけた戦いに邁進していった。



「もうすぐだ。もうすぐ戦いは終わる」

感慨深いものを感じながらレッドがつぶやいた。

彼の所属する極東第13戦隊の敵は魔王軍だった。

初代レッドから始まり、2代目からレッドを引き継いでから数年、いよいよ戦いは終わりを迎えようとしていた。

——20年前。

東京渋谷の道玄坂にゲートが現れ、異世界と繋がってしまった。

ゲートから現れたのはおとぎ話に出てくるような魔物たちだった。

すぐさま極東第13戦隊が組織化され、防衛作戦が展開された。

その頃には世界同時多発危機に対するマニュアルが整備され、スムーズな組織化がされたとレッドも聞いている。魔力をもった敵に対して開発されていた魔力吸収スーツを着用して迎撃にあたる。この戦隊スーツには倒した魔物の魔力を吸収して力に換えるチート能力があった。

初代レッドの時代には四天王のうちの1匹を亡き者とした。

2代目レッドの時に残りの四天王も撃破

することに成功していた。

そして、今のレッドの代になってから残党狩りを行って、魔王を執拗に追いつめてきた。ゲートも破壊してあるので、あとは東京のどこかに隠れ住んでいる魔王を見つけ出して始末するだけ。完全勝利は時間の問題……そのはずだった。

「なぜこんなことに」

レッドが苦々しい表情となる。

最初にやられたのはグリーンだった。

夜の寂れた街路。

そこで発見されたグリーンは戦隊スーツには一切の魔力が残っていなかった。初代グリーンの時代からコツコツと吸収してき

た魔力がすべて奪い去られてしまっていた。

しかも、どういうわけかグリーンは昇天した姿で発見された。アへ顔を浮かべた全裸の格好で見つかったのだ。グリーンは今でも意識が戻らず、病院で生死の境をさまよっている。

グリーンだけではない。

ブラックも、ブルーも、正体不明の敵にやられてしまった。

彼らは命に別状はないものの、そのスーツからは魔力の大半が奪われてしまっていた。万全の状態で残るのはレッドとイエローの二人だけになっていた。

「くそッ」

悪態をつき、レッドが急ぐ。

イエローの身に危険が迫っているのだ。

正体不明の敵の探索任務にあたっていたところ、いきなりイエローからの救難信号をとらえ、すぐに消えた。

イエローに何かあったことは明らかだった。

その場所に向けて、レッドが神速の速さで駆けていく。ビルからビルに飛び移りながら、最短距離で走る。すぐに救難信号のあった地点にたどりつき、それを見た。

\*

深夜の暗闇があたりを支配している。街中のビルとビルの間。

その行き止まりの空気さえ腐ってしまっているような場所で、レッドは初めて正体不明の敵の姿を見た。その正体は信じられないものだった。

「じよ、女子高生？」

彼女は制服を着ていた。

それはどこからどう見ても学校の制服だった。あどけない童顔の顔つき。ボブカットの幼い少女。その頭には角も生えていない。どこからどう見ても、ただの人間だった。

「ううううッ！」

少女の姿を呆然と見つめていたレッドが、うめき声を聞いてハッと我にかえった。

視線の先——イエローの顔面が、少女の爆乳に捕食されてしまっている事実が脳みそにようやく届いた。

「え？」

訳が分からずレッドがまたしても呆然とする。

少女の大きなおっぱい。

制服のボタンがはずされて露出している胸の大きさが、脳みそのすべてをジャックしてくる。それを見たら一瞬たりとも目が離せなくなる。すべての男にとっての天敵みたいなおっぱい。そんな魅惑の爆乳にイ

エローの顔面が捕食されてしまっていた。

「ううううッ！」

呻き声が聞こえてくる。

イエローの後頭部には少女の両腕があてがわれていた。

抱きしめられるようにしてイエローの顔面がおっぱいに生き埋めにされている。イエローの体がびくびくと痙攣していく。さらに悪いことにイエローの戦隊スーツが黄色く発光しているのが見えた。その光は少しづつ少女のおっぱいに吸い込まれていく。魔力が吸収されているのだ。

「イエロー！」

呆然としていた一瞬が過ぎ去り、レッドが駆け出す。

右拳に力をこめて、敵であるはずの少女に向けて必殺のパンチを振りかぶった。

「わ、わわっ」

それに気づいた少女が獲物であるイエローを放して、間一髪でレッドの拳を避けた。引き抜かれたイエローの体が崩れていく。それをレッドが抱き寄せて、助け出した。

「イエロー！　おい、イエロー！　しっかりしろ！」

呼びかける。

けれど反応がまったくなかった。ぴくぴくと痙攣するだけで「ううう」という弱々しい喘ぎ声しか漏れてこない。レッドがイエローのフルフェイスを解除してやる。現れたのは、アへ顔を浮かべて、昇天している男の顔だった。

「く、遅かったか」

そつとイエローの体を地面におろして切り替える。

目の前——そこでたたずむ正体不明の敵と向かいあった。

(どこからどう見ても人間の女だ)

制服姿のまだ幼さの残る童顔少女。

身長も低めで愛くるしい瞳をしている。けれど、はだけた制服から見える爆乳だけが明らかに規格外だった。

「おまえ、なにものだ」

レッドが構えながら言う。

少女があわあわと慌てたように立ち上がった。

彼女はそのまま綺麗にお辞儀をした。深々とレッドに頭を下げてから、レッドを上目遣いで見上げて、少女が口をひらいた。

「あ、わ、わたし、魔王軍臨時アルバイトの大山詩織です。よ、よろしくお願ひします」

\*

恥ずかしそうな声。

彼女の言葉にレッドは首をかしげた。

「臨時アルバイト？」

意味が分からない。

魔王軍の臨時アルバイト？ なんなのだからそれは。

「は、はい。アルバイトです。戦隊討伐の

アルバイトの募集があつて、応募したら合格しました。魔王軍というか、魔王さんに雇われたアルバイトとして、今ここに派遣されています」

アルバイト。

ということとは、彼女は魔王に雇われただけの人間ということだ。彼女は魔物ではない。自分たちと同じ人間。それが魔物側の味方をしている。その事実にはレッドの怒りが頂点に達した。

「き、君は分かっているのか。自分がしていることを」

「どういうことですか？」

「魔物の味方をしているということだ。世界

の危機の味方をしている。つまり人類の敵になっているということが、君には分かっているのか？」

少女が——詩織がキョトンとした表情を浮かべた。「ええと」と言いよどみながらも、彼女は、

「別にそういうわけじゃないと思います」

「な、なんだと？」

「わたしはただのアルバイトですから。雇われて、時間どおりに仕事をするだけなんです。だから別に、世界の敵とか、そういうものじゃないですよ」

彼女が笑いながら言う。

「それでもお給金のためにはきちんとやらなくてはいけません。ただのアルバイトですが、ヒーローさんたちと、わたし戦います」

お金のために働く。

アルバイト感覚でヒーローたちと戦うと言うのだ。その傲慢な考えにやはりレッドは怒り狂った。人類のため、そしてかけがえない家族のために日夜努力を続けてきた自分たちに、なんの覚悟もないアルバイト風情が立ち向かおうとしてきている。それが何よりも許せず、レッドの頭は冷酷に冴えた。

「それなら相手になってもらおうか」

レッドが構えをとる。

怒れば怒るほどに頭が冴える特殊性をレッドはもっていた。

怒りが力になるのだ。

これまでの魔王軍との戦いでもその才能がいかになく発揮されてきた。アルバイトであろうと容赦はしない。少女の甘い考えを粉々に砕いてやる。レッドはそう思考し、そのとおりにしようとした。しかし、

「あ、無駄ですよ？」

少女が当然のように言った。

そのかわいらしい声にレッドの虚が突か

れる。それがレッドの最大の敗因だった。目の前の少女に勝つ可能性があったとすれば、彼女が動く前にすべてを終わらせる必要があったのだ。

「男の人はわたしには勝てません」

「な、なに？」

「はい、見てください」

詩織が制服のボタンをはずした。

そして、その凶器をレッドに見せつける。

効果はてきめんだった。



「う」

レッドが呻く。

彼の目の前には巨大すぎるおっぱいが露出していた。制服からこぼれた大きな乳房。ブラジャーからもあふれかえってしまっている柔肌が、レッドの視界に飛び込んでくる。その柔らかそうな二つの果実を見ただけで、レッドの意識が奪われてしまった。

(な、なんだこれは)

おっぱい。

そのはずだ。

けれども普段オカズにする動画や画像のおっぱいとは明らかに違っていた。どう考

えても人間離れしているようにしか見えな  
い。張りがある健康的な肌。そこに水滴が  
落ちて簡単にはじけてしまいそうなほど  
テカテカに輝いた生命力の塊。これまで見  
てきたどんな爆乳よりもデカイ。普通なら  
重力に負けるはずなのに、そのおっぱいは  
物理法則にすら打ち勝ってしまっているよ  
うに思える。その大きさと、形を前にして、  
レッドの意識が朦朧としてきた。

(そ、それに、なんだか甘い匂いが)

さきほどからレッドの鼻を刺激してくる  
匂い。

詩織がおっぱいを露出したのと同時に強  
くなったその匂いを嗅げば嗅ぐほどに、レッ

ドの体から力が抜けていく。頭が麻痺して、レッドの力の源である怒りが消えていってしまう。代わりに現れるのは欲情。色欲に支配されて、レッドの足腰がガクガクと震えてしまった。

「あ、すごいですね。まだがんばれるんですか？」

詩織が驚いたように言った。

「さすがは第13戦隊のリーダーさんですね。今までの方は、これでおしまいでしたけど」

「な、何を言ってるんだ、お前は」「それなら、これでどうですか？」

えい。

かわいらしいかけ声。

同時に詩織がブラジャーをはずした。「あ」という声がどこからか響いた。少女の巨大すぎる生乳がこぼれてきて、ついにレッドの意識がおっぱい一色になってしまった。

「しゅ、しゅごいいいいッ！」

レッドの口から情けない声が漏れる。

目を血ばらせたレッドが、ハアハアと息を漏らしながら食い入るように凝視する。少女の生乳。現実感がないほどにデカいの、やはり重力に逆らって鎮座するおっぱい様に意識のすべてをもっていかれ、それ

以外になにも考えられなくなってしまふ。

「はあはあはあ」

荒い息が漏れる。

普段のレッドからは考えられない乱れよう。質実剛健を地でいく強い男が「おっぱい」に屈服してしまっている。怒りをパワーにする男の体から怒りがなくなっていた。だからだろう。レッドは最後の一瞬まで、詩織がゆっくりと自分に近づいてくることに気づけなかった。

「はい、おしまいです」

ぎゅううううううッ！

「むうううううッ!？」

捕食された。

そうとしか見えなかった。巨大なおっぱいがレッドの顔を捕食し、そのまま生乳の中に生き埋めにしてしまっていた。

「むっぐうううううッ!」

レッドがじたばたと暴れる。

必死の抵抗。

おっぱいで顔を包み込まれているだけなのだ。こんな拘束、簡単に抜けられる——そう思っていたレッドはあまりにも愚かだった。

(しゅ、しゅごいいいいッ！)

顔面に伝わってくる生乳の感触で、一瞬にしてレッドの体から力がなくなってしまうた。

抵抗して暴れていた体が少しづつ脱力していく。

それほどまでに詩織のおっぱいの威力はすさまじかった。顔面に伝わってくる柔らかさの前にレッドの体が屈服していく。顔面には健康的なピンク色の乳首がこすれ、それだけで下半身が溶ける。そんなおっぱいの感触だけでもダメなのに、息を吸うと猛毒みたいな甘い匂いで頭が麻痺してしまっ

「むうう……むうう（ビクビクンッ！）」

ついにレッドの体が完全に脱力した。

少女のおっぱいに頭を突っ込みながら、両手両足をダランと垂らし、ぴくぴく痙攣するだけになってしまった。

「男の人は、わたしのおっぱいには勝てないですよ」

できの悪い生徒に言い聞かせるようにして、詩織が続ける。

「レッドさんだけではないので安心してください。年上だろが歴戦の勇者だろが、

わたしのおっぱいの前では無力なんです。みなさん、わたしの弟みたいに甘々のおっぱい奴隷になってしまってくださいよ」

「むううう……むううう……」

「あ、わたし弟がいるんです。それがもうかわいくてかわいくて、毎日かわいがってあげているんですが、そのせいで重度のおっぱいジャンキーになってしまいました。そんな姿もかわいくて、毎日おっぱいを堪能させてあげているんですよ」

こんなふうには。

ぎゅううううううッ！

「むううううううッ！」

レッドの顔面がさらに詩織の底なしおっぱいに引きずりこまれていく。乳肉が頭部全体を生き埋めにして、その柔らかさの前にレッドの体がさらに脱力してしまう。おっぱいの谷間の奥底に眠っていた甘い匂いを嗅いで、さらにレッドが狂っていく。

(頭バカになりゅうううッ！)

甘い匂いを嗅げば嗅ぐほどに頭が麻痺した。

すごい幸せな気分になって、敵のおっぱいに拘束されているのも忘れて夢中になってしまふ。逃げないといけない。けれど前頭葉が命じた電気信号は各筋肉に届く前に溶けてなくなってしまう。それもこれも、

少女の甘い匂いのせいだった。

「フェロモンです。すごいでしょ？」

困惑したレッドに答えを与えようと詩織が言う。

「わたしのフェロモンは特殊みたいで、みんな夢中になってしまいうんです。どんなに強情な男性もこれをくらったらいちころです。みんな従順なおっぱい奴隷になってしまいます。ふふっ、今のレッドさんみたいに、体中の力を失って、びくびく痙攣するだけの情けない姿になってしまいうんですよ」

言葉どおりレッドは自分の体に力が入ら

ないのを感じた。それどころか、抵抗しようという気持ちすら溶けてなくなっていくのを感じる。

（勝てない……勝てないんだ……）

そんな気持ちがレッドの中にたまっている。

それほどまでにおっぱいの威力がすさまじかった。怒りを力にするレッドの特殊性が、少女の凶悪フェロモンによって完全に無力化されてしまっている。レッドの中の怒りがなくなり、かわりにおっぱいに対する隷属心でいっぱいになってしまった。

「はい、墜ちましたね」

詩織が言う。

「それでは魔力を吸収しますね？」

ん、と甘い声が漏れる。

同時にレッドの体が赤く明滅した。それはこれまで敵を倒して吸収してきた魔力そのものだった。戦隊スーツにため込まれていたエネルギー——それがゆっくりと少女のおっぱいに向かって動いていく。

「うわ、すごい魔力ですね」

詩織が驚いたように言う。

「さすがはレッドさんです。戦隊のみなさんの中でも一番強い……さすがですね」

賞賛される。

けれど彼女は今、あまりにも簡単にレッドから魔力を吸収しているのだった。その規格外の爆乳で、レッドが必死の努力の末にたくわえてきた魔力を吸収してしまっている。それがレッドには信じられなかった。

（な、なんで……この子はただの人間のはずなのに……なんで魔力を吸収することなんてできるんだ）

薄れいく意識の中で思う。

その答えは詩織からもたらされた。

「実はわたし、魔王さんに魔法をかけても  
らったんです。この魔法、相手が屈服した  
らその人がもっている魔力を吸収できる魔  
法なんですって」

「むうううッ!?!」

「最初は強いヒーローさんたちを屈服させ  
ることなんてできないだろうと思ってい  
たんですが、おっぱいでパフパフしてあげ  
たら簡単にできました。そうするとほら、こ  
うやって、みなさんの魔力を吸収できるん  
です」

ぎゅううううううッ!

抱きしめが増す。レッドの光が強くなっ  
て、それが少女のおっぱいのほうへと移動

していく。貴重な魔力がどんどん吸収され  
ていった。

(だ、大事な魔力が、こんなことで)

これまで敵を倒して手に入れてきた魔力。  
自分だけではない。初代レッドや2代目  
レッドたちの努力の結晶。男たちが命をか  
けて戦いに勝利し、勝ち取ってきた大事な  
魔力が、こんなふざけたおっぱいで吸収さ  
れてしまうなんて、悔しくて仕方なかった。

(許せない)

レッドの中に怒りが生まれる。

理不尽な状態に対して強まるレッドの力。

その怒りのパワーを活力として、今、レッドがおっぱい監獄から抜けだそうと、

「ん、おいしい」

「あひひひひひひひッ！」

無駄だった。

おっぱいの前ではあまりにも無力。その乳肉の感触と、フェロモンの多幸感によって、レッドの怒りは霧散し、吸収されてしまう。しかも、

(ぎ、ぎもじいひひッ！)

さきほどから魔力を吸い取られるたびに感じる快感。まるで射精をしているような

エクスタシーが全身を貫いてくる。気持ちよさがずっと続き、レッドの体がびくんびくんと痙攣していった。

「きもちいでしょ？」

詩織が言う。

「魔力を奪われてきもちがいいんですね？  
そういうものだって魔王さんが言っていました。だから恥ずかしがらなくてもいいんですからね」

甘い言葉。

それにレッドの心がさらに屈服してしま  
う。

「ぜ〜んぶ、わたしのおっぱいで吸収してあげます」

にっこりと笑って、

「おっぱいに夢中になってくださいね、レツドさん」

＊

時間が経過する。

逃げることもできず、レツドの顔面は詩織の爆乳に拘束されたままだった。ずっと魔力が吸収されていき、レツドの絶頂もまたずっと続いてた。

（負けるのか……このまま……おっぱいなんか全部奪われて……）

力なくピクピク痙攣するだけになったレツドが絶望の中で思う。

なんども怒りを力に変えて逃げだそうとしたが、やはり無駄。怒りが生まれたのと同時にその力ごとおっぱいに吸収されてしまう。吸収されれば快感で体が脱力して動けなくなる。少女のおっぱいに顔面を突っ込み、両手両足を脱力させた男が、大事な魔力を奪われていった。

（すまない……みんな……）

謝罪の言葉が脳裏によぎる。

人類の敵に敗北してしまった。

それも魔王軍そのものではなく、魔王軍に雇われたアルバイトの少女に完敗してしまったのだ。

その情けなさ過ぎる結末にレッドの瞳からぼろぼろと涙がこぼれていく。けれど、そんな男の涙すら少女の爆乳によって吸収されてしまう。ヒーローとしての尊厳も、男としてのプライドも、なにもかも少女の爆乳に奪われていく。

(負ける……負け……)

あきらめてしまった男。

ぴくぴくと痙攣していくだけの敗北者。

しかし、次の瞬間、唐突に魔力の吸収が終わった。

「考えてみれば、このまま全部奪ってしまったらダメですよね」

詩織が真剣そうにつぶやいている。

レッドが訳も分からずにいると、突然レッドの頭部がおっぱいから引き抜かれた。首と顔の下半分は豊富な谷間によって挟まれ、拘束されながらも、レッドの顔面だけが乳肉と乳肉の間からひょっこり顔を出していた。

(なぜ、吸収をやめたんだ?)

ピクピク痙攣しながらレッドは疑問に思っていた。

かなりの魔力が吸収されたといっても、まだスーツには魔力が内包されていた。その途中で彼女が吸収を止めたのはなぜなのか。訳が分からず、レッドは少女のおっぱいの中でアヒアヒと悶えるだけだった。

「今日のところは見逃してあげますよ、レッドさん」

詩織がニッコリと笑って言う。

レッドは困惑して少女を見上げることしかできなかった。

「考えたんですけど、このままレッドさん

の魔力を吸収したら終わってしまいますよね」

少女がレッドを見下ろしながら、

「レッドさんの魔力を吸収したら魔王軍の勝利です。そうなると困るんですよね。だって、」

淡々と、

「魔王軍が勝ってしまうと、わたしのアルバイトも終わっちゃいますから」

ただそれだけ。

アルバイトが終了になって賃金を得られ

なくなってしまう。そんな理由で、詩織はレッドにとどめを刺さないというのだ。

「だから見逃してあげます。あと一步のところでレッドさんが決死の力で抵抗してきた、イエローさんを抱えて逃げてしまったと、魔王さんにはそう報告しておきますので、安心してください」

どさっ。

詩織がレッドを解放する。

久しぶりにおっぱいから逃げることできたレッドの体が、そのままうつ伏せに倒れる。もはや体に力が入らないらしく、その体がガクガクと痙攣していく。そんな惨めな扱いを受けながらも、レッドはあくま

でも誇り高い男だった。

「ふ、ふざけるな」

ふるふる震える両腕で体を起こそうとする。

けれども全身の力が脱力してしまっているせいで、途中でガクンと力尽き、また地面に突っ伏してしまう。それが繰り返し返されていく。

「ふざけるな。そ、そんな理由で、勝負を途中で投げ出すなんて……そんなこと、許されていいわけがないだろう」

これは命をかけた戦いなのだ。

魔王と人類の互いの存亡をかけた戦い。

それなのに、少女はあくまでも自分のアルバイトがなくなったら困るという理由で勝負に水をさそうとしている。レッドにはそれがとにかく許せなかった。

「立とうとしても無駄ですよ、レッドさん」

そんな地面に這いつくばっているレッドのことを詩織が見下ろしていた。その顔には明らかに真剣な表情は浮かんでいなかった。

「わたしのおっぱいをくらって動けるわけじゃないじゃないですか。1時間はそのままですよ？」

「く、くそッ！ 動けえええッ」

「無駄ですって。そんなにがんばらなくても、見逃してあげるって言うてるじゃないですか。なにがそんなに不満なんですか？」

キョトンとしている少女の表情にレッドの怒りが増す。その舐めきった態度がどうしても許せなかった。レッドはなんとか立ち上がろうとして、それでもやはり力尽きて、地面に顔面から突っ伏してしまふ。

「あ、証拠写真だけとらせてくださいね。魔王さんに疑われてしまいますから。業務報告はしておきたいので」

レッドを無視して少女がてきぱきと準備

を始める。

スマフォを置いて撮影画面にする。

タイマーをセットすると、地面に倒れたまま気絶しているイエローを回収して戻ってきた。そして、まだプルプル震えたまま立ち上がるうとしているレッドの髪の毛を片手でつかみ、同じようにイエローの髪の毛もつかむと、ぐいっと持ち上げてしまった。

「はい、記念撮影ですよー」

そう言ってセットしたスマフォにむかってニッコリと笑顔を浮かべたバイト少女。

その両手には戦利品であるレッドとイエローが握られている。髪の毛をつかまれ、

持ち上げられて、強制的にカメラ目線にさせられた男たち。

「や、やめろおおおッ！」

レッドが暴れるがやはり無駄だ。

脱力した男が情けない表情を浮かべたまま、少女によって宙づりにされ、最後にカシャッと、写真をとられてしまった。

「ん、これでよしっ」と

詩織がすぐに男二人を解放してやる。

彼女がセットしたスマフォを回収して写真のチェックをし始める。これなら大丈夫そうですと笑った少女が、撮影した写真を

レッドに見せつけてきた。

「ほら、よく撮れてますよね」

「あああああッ！」

レッドの眼前に写真が突きつけられる。

写真の中では、自分とイエローが無様なアへ顔をさらして映っていた。

自分はこんな顔を浮かべているのかと、今更ながらに驚愕する。少女が、にっこりと優しげに笑っているのも衝撃的だった。そのデカいおっぱいも相変わらずだ。レッドの股間がすぐに勃起した。

「乱暴なことをしてすみません。戦隊の人たちが情けない姿になっていると魔王さん

たちが喜ぶんですよ。臨時ポーンナスをくれることもあるので、できる限り戦隊の人が情けない姿になるように写真撮影して、業務報告にしているんです」

にっこりと笑って少女が言う。

「このバイト、すごく時給がいいので、できる限り続けたいんです。なので、次の戦いでもちゃんと手加減してあげますから安心してください」

少女がレッドを労るようにして、その頭を撫でてやった。

「これからよろしくお願いしますね、レッ

ドさん」

それでは失礼します。

そう言って詩織が去っていく。レッドはそれでも立ち上がろうと無駄な努力を続けた。

「ま、待て！」

叫ぶ。

うつ伏せで倒れ、這いつくばるようにして詩織の後ろ姿にむかって、

「勝負しろ！ 最後まで勝負しろ！」

滑稽に怒鳴りちらかしていく。

けれども詩織は振り返りもしない。相手にされていけないのだ。すぐに少女の後ろ姿も見えなくなってしまった。

「ち、ちくしょおおおおッ！」

レッドの怒りが彼に力を与える。

それでも立ち上がることにすらできなかつた。ピルの路地裏で、アへ顔を浮かべた二人の男が、力なくぴくぴくと痙攣を続けていった。

## 第2章

敗北した翌日。

レッドは基地内にある医務室に来ていた。そこで仲間たちの変わり果てた姿を見下ろし、ぎりっと歯ぎしりをする。レッドの視線の先には、ベットに横たわったまま意識を取り戻さない仲間達の姿があった。

グリーン、

ブラック、

ブルー、

イエロー。

彼らが酸素吸引機を装着された状態で寝ている。

心電図の波形と音だけが、静まりかえった医務室で活動を続けていた。

「グリーン」

そんな仲間たちの中にあっても重傷なのがグリーンだった。

最初に餌食になったのが彼なのだ。測定の結果、魔力が完全に奪われてしまっていることが分かっていた。その魔力は魔王軍から奪ったものだけではなく、グリーンがもともともっていた生命力も含まれているとのことだった。

ほかの仲間たちは完全に魔力を奪われていないので、じきに目を覚ますだろうということだったが、グリーンに関しては諦めたほうがいい。医者からはそう言われていた。

「くそッ！　なんでこんなことに」

思い出すのは昨日のことだ。

おっぱいがデカいだけの普通の女子学生。制服姿の少女にボコボコにされてしまい、魔力の大半を奪われてしまったこと。魔王軍のアルバイトに手も足も出ずに完敗したことが思い出されて、レッドの怒りがたまっ  
ていく。

「このままじゃ……このままじゃすませない」

レッドの怒りはそのまま力になる。奪われた魔力を補填してしまうほどの勢

いでレッドの怒りのボルテージが増している。昨日の少女。大山詩織に対する憎しみで、さらに怒りを強めていった。

「お兄ちゃん、あんまり無理しないで」

と、その時。

医務室のドアが開いて少女が入ってきた。その姿を見て、レッドの張り詰めた顔が若干ではあるが緩んだ。

「比奈か。こんな時間まで起きてて大丈夫なのか？」

「うん。体調もいいみたい。それに、みなさんがこんなふうになって、一人で寝ていられないよ」

哀しそうにベットの仲間たちを見つめる  
比奈だった。

彼女はレッドの妹だった。

戦隊の中にあつての紅一点。

レッドとは年が離れており、まだ初等部に所属している少女だった。戦隊のピンクを襲名しているが、その幼さと、体の弱さを考慮されて、実戦に出ることは許されていない。病気がちで、いつも基地内の自室で寝ている少女も、仲間たちが心配で寝ずの看病を続けているのだった。

「お兄ちゃん、大丈夫なの？」

比奈が心配そうに問いかけてくる。

「強いブラックさんまでこんなふうになつて、もしお兄ちゃんまでやられたら……」

「比奈」

「もうわたしにはお兄ちゃんしかいないの……だからすごく心配……」

気弱な様子にレッドの心がゆらぐ。

両親は他界し、親族付き合いもなかった  
ので、家族と呼べる存在はレッドと比奈だけだった。妹が心細く思っていることを感じ取って、レッドが比奈の頭に手を置き、撫でてやる。

「大丈夫だ。心配するな」

「お兄ちゃん」

「俺は負けない。人類のため、仲間のため、  
そして、お前のためにも、俺は絶対に負け  
ない」

決意をあらたにする。

比奈は腫に涙をためながら、兄であるレッドをぎゅうっと抱きしめてきた。その幼い体にあつて最近自己主張を始めてきた大きなおっぱいがレッドの体で潰れる。その感触に一瞬だけ呻いてしまったレッドが、それでも妹の頭を撫でることはやめなかった。

（絶対に勝つ）

決意を固める。

レッドはすぐに行動に出ることにした。

\*

敵の狙いは自分なのだ。

そうであれば話しは簡単だった。自分の身をさらしていればあいつは現れる。深夜の町を徘徊して、魔王軍の残党を狩っていると、すぐに敵は現れた。

「こんばんは、レッドさん」

にっこりと笑った少女。

やはり制服姿の大山詩織が、警戒心ゼロでレッドの前に現れた。深夜の公園。人の気配がなくなったシーンと静まりかえった場所で、照明灯の光に照らされた詩織が気

さくに話しかけてくる。

「すごいですねレッドさん。昨日の今日でもう動けるんですか?」

まるで友達に対するような態度だ。  
レッドの怒りが増した。

「俺は動ける。だが、ほかの仲間はまだ意識を取り戻さねえよ」

お前はそれだけひどいことをしたんだ。  
そうクサビを打ち込むための言葉は、思いのほか少女に効いたみたいだった。顔をゆがめた少女に気をよくするレッド。しかし、すぐに自分の考えが甘かったことを思

い知らされた。

「そうですね、ごめんなさい。最初だったので手加減が難しかったんですよ」

「は?」

「特に最初のグリーンさんは、コツも分らず絞りとりすぎてしまいました。戦隊のみなさんはもっと強いと思っていたので、本気でやったのがまずかったですよね。魔力だけでなくグリーンさんの生命力まで搾り取ってしまったみたいで……魔王さんには褒められましたけど、グリーンさんには悪いことをしてしまいました」

反省です。

軽い。男の命を奪い取ったも同然の所業

をしておいて、少女の態度は明らかに軽かった。

「でも安心してください。もう戦隊のみなさんの実力も把握できましたし、コツもつかんだので、しっかりと手加減できると思っています」

「……………」

「絞り過ぎるということはないので大丈夫です。レッドさんのことも、ギリギリの吸収で止めておいてあげますから、安心してくださいね」

「……………」

驚いた。

怒りが頂点に達すると静かになるのだ。

心のうちが波すらたない湖のように凧いでいる。ただあるのは目の前の敵を駆逐するということ。それだけだった。

「……………」

構えをとる。

キョトンとした少女が慌てている。

その焦りを怯えととったレッドが、左手首に装着したベルトのボタンを押し、一瞬にしてスーツ姿に変身した。

「わ、わ、もうやるんですか？」

「嫌なのか？」

「い、いえ……でももう少しお話しさせてもらっていたほうが……その、アルバイト

の時間を伸ばせて、報酬も多くもらえるので有り難いんですが……」

もう何も感じなかった。

レッドは静かに一言、

「お前、もう黙れ」

そう言って、少女に向かって突進した。

(一撃で決める)

怒りを力に変えて神速の勢いで詩織に迫る。相手が女だとか、子供だとか、そんなことは何も関係がなかった。レッドの右拳が、詩織の顔面に、

「わ、危ないです」

「な!？」

詩織がひょいっとレッドの拳を避けた。

その速さはレッド以上だった。最初から本気だったはずの一撃が簡単に避けられてしまい、レッドの顔に呆然とした表情が浮かぶ。

「くそ!」

再び殴りかかる。

けれど同じだった。

レッドがどれだけ殴ろうとしても、蹴ろうとしても、詩織はそれをひょいっと避け

てしまう。連続した攻撃も彼女の小さな体がすばしっこく動いて、すべて空を切ることになった。

(う、嘘だ)

自分の攻撃が通用しないということに驚く。

これまで魔王軍の幹部を血祭りにあげてきた自分の拳が、こんなただの人間に通用しないということが、とても信じられなかった。

「うううッ」

ハアハアと息を乱して立ちすくむレッド。

それとは対照的に、詩織は息を切らすこともなく、にっこりとした笑顔で立っているだけだった。

「終わりですか？」

「う」

「みなさんから魔力を吸収して、わたしも強くなっているんです。だから、レッドさんの攻撃を避けるのなんか簡単です」

すごいでしょ？

そんなふう勝ち誇る制服姿の少女。

レッドは絶望の表情を浮かべて、少女のことを見つめるしかなかった。

「こんどはこちらの番です」

詩織が言う。

「暴力はしないので安心してください。今日もこちらで攻撃します」

少女が制服のボタンに手をやる。

それだけで巨大なおっぱいがぐんにやりと歪み、レッドの股間が反応してしまった。

(見ちゃダメだ)

レッドの本能が最適な防御を実行する。

目をつむって視覚情報をシャットアウトしたのだ。だから、詩織がブラジャー姿になった瞬間でも、レッドの意識は保たれた

ままだった。

「あ、目をつむるなんてずるいです」

詩織が言う。レッドが「ふっ」と笑った。

「ズルなわけあるか。言っておくが、俺は心眼を習得している。だから、目をつむったままでも戦うことはできる。残念だったな。おまえのおっぱい攻撃は俺には通用しない」

勝ち誇って構えをとる。

息も整ってきた。あとはこちらから攻撃をあてるだけだ。おっぱい攻撃は封じた。そのはずなのに、詩織はどこまでも余裕そ

うだった。

「ふふっ、目をつむっていられるか試してあげます」

「な、なに!?!」

「わたしのおっぱい、最近、ますます大きくなってきてしまったんですよね」

その言葉にレッドの体がピクンッと痙攣した。

昨日見たあのおっぱいが脳裏に再生されてしまう。

(そ、想像しちゃダメだ。こいつのおっぱいを思い出したら、ダメになる)

怒りに集中しようとする。

仲間たちを意識不明の重体にしてしまった目の前の敵に怒りを向けようとして、

「レッドさんたちの仲間の魔力を吸収して、おっぱいが大きくなりました」

「う」

「魔力を吸収するとおっぱいに蓄えられるみたいなんです。だから、昨日イエローさんとレッドさんの魔力を吸収して、また大きくなってしまったんです」

聞いちゃダメだ。

聞いちゃダメだと分かっているのに体は正直だった。少女の言葉を聞いてハアハアと息が荒くなっていく。股間が熱くなって、

勃起しそうになるのをなんとか耐えるので  
必死だ。

「109センチ」

ビクッ！

「Lカップになってしまいました」

ビクビクッ！

客観的な数値に屈服する。

小柄な少女の胸が109センチ。しかも  
Lカップ。そんな爆乳、大学生にだってい  
ない。日本中を探したって簡単にはみつか  
らない規格外のおっぱい。それをまだ高等  
部でしかない少女が身につけてしまったと

いうのだ。

「ほら、ぐんにやり柔らかかそうでしょ？」

「あああッ！」

「すごいですよ、わたしのおっぱい。ブラ  
ジャーからこぼれちゃってます。ふふっ、  
レッドさんの魔力で大きくなったのでブラ  
も新調したんです。今日はその帰りだっ  
たんですよ」

想像が止まらない。

視界の向こうでさらされているはずの少  
女の生乳。その大きさだとか、迫力を想像  
してしまい、レッドの体がガクガクと震え  
た。その股間が屈服するように勃起してい  
く。

「レッドさん、見なくていいんですか？」

詩織が言う。

「わたしのLカップおっぱい、見ないなら  
しまっちゃんいますけど」

その言葉でついにレッドが負けた。

自然と。自分の意思とは無関係に。レッ  
ドの瞳がひらいて、それを見てしまった。

「ああああああッ！」

レッドの視界にそれが飛び込んでくる。  
少女のLカップ爆乳。制服がはだけたブ

ラジャー姿の少女を前にして、理性を失っ  
た猿と化したレッドが、その一点を凝視し  
始めてしまった。

「はい、一丁あがりです」

詩織がにっこり笑って言う。

「見ちゃいましたね、レッドさん」

「ひいひいッ！」

「見てしまったらもうダメです。ふふっ、レッ  
ドさんったら、すぐく間抜けな顔で隙だら  
けです」

「あああああッ！」

「せっかく目をつむって勝とうとしてたの  
に負けちゃいましたね？ でもみんなそう

なるので安心してください。わたしの弟も、毎日一生懸命に目をつむっておっぱい見ないようにしているんですが、わたしがちよっと言葉で責めると我慢できずに見てしまうんです。今のレッドさんみたいにおっぱいに夢中になってしまいます」

詩織の言葉はレッドに届いていなかった。すべての意識は目の前のLカップおっぱいに向けられてしまっている。

健康的な肌色。

艶があり張りのある強そうなおっぱい。

その形はまったく崩れておらず、奇跡のような美しさを保ったまま、その大きさがけが異次元だった。レッドの目が血走る。少女の声など聞こえない。またしても、少女

が近づいてくることにも気づけなかった。

「はい、ぱっくん」

「むううううううッ！」

終わった。

レッドの顔面が詩織の爆乳によって捕食されてしまった。

豊満な乳肉の暴力。

その深すぎる谷間に頭部を引きずりこまれて、生き埋めにされてしまう。顔面どころか頭部全体に伝わってくる底なし沼みたいな乳肉の感触で、レッドの体がビクンビクンと跳ねていく。



「息も吸ってくださいね」

「すうはあああッ！」

そして息を吸ってフェロモンで脳を焼かれる。

頭が麻痺しておっぱいに夢中になってしまふ。

世界のために戦わなければいけないとか。人類を守るためとか。憎い敵に対する怒りとか。そういった大事なものをすべてがドロドロに溶けて、おっぱいに吸収されてしまふ。レッドの体がダランと脱力して、少女のおっぱいに顔をつっ込みながら、びくびくと痙攣を始めてしまった。

「はい、完全屈服ですね」

「むうう……むうう……」

「魔力、吸収しますね？」

キュイイインンンンッ！

音が鳴り、レッドの体が赤色に明滅する。その光がゆっくりと詩織のおっぱいへと流れていく。そのたびに、レッドの体がビクンビクンと痙攣した。魔力を吸われて、快感で絶頂しているのだ。

(だ、ダメだ。抵抗しないと)

そう思っても無駄だった。

体に力が入らない。おっぱいに完全敗北してしまっているのが分かる。こうなったらもうダメだ。魔力を吸収され続ける。力

がまったたく入らなかった。

「ん。すごい。レッドさん、昨日より魔力が大きくなってますね」

詩織が驚いて言う。

「魔王さんの言ってたとおりなんです。レッドさんは怒りを魔力に変換できる特異体質なんですもんね。すごいです」

少女が笑って、

「でも、いくら特異体質でも、わたしのおっぱいにかかればすぐに吸収しきってしまいます。そうしたらバイトも終わりになって

しまいますよね。どうしましょうか」

かわいらしく困った顔を浮かべて詩織が思案する。彼女は妙案を思いついてしまったらしく、すぐにそれを実行してきた。

「そうだ。魔力吸収をコントロールしてみよう」

「むうううッ!？」

「ええと、気を集中して、おっぱいを閉じるみたいなイメージで、こう!」

詩織のかけ声と共に、明滅していた光がなくなった。レッドの体からおっぱいに流れていた流れもなくなり、ぴたっとすべてが制止していた。

「あ、できました。けっこう簡単ですね」

詩織がなんなく言う。

さらには、

「そうだ。こうすれば魔力を一点に……あ、できましたね」

詩織は完全に魔力をコントロールするこ  
とに成功してしまった。

彼女の体から発せられるピンク色の光が、  
右腕だけに集中する。それが、左腕、右足、  
左足へとうつつていく。強大な力が集中す  
る感触に、レッドはおっぱいに捕食されな  
がら戦々恐々としていた。

（ま、魔力を完全に操ってる。そんなの、聞  
いたこともない）

少なくともレッドにはできないことだっ  
た。

この膨大な魔力の集中した拳で殴られた  
らどうなるのか。それを考えただけでガク  
ガク震えてしまった。

「簡単なんですネ、魔力をコントロールす  
るのって」

「むううううッ！」

「これなら、時間をかけて戦うことができ  
そうです。そうすればお給金も増えるので、  
レッドさんには悪いですが、少し付き合っ

てもらいますね」

ぎゅうううううッ！

さらにレッドの頭部をLカップ爆乳の谷間に引きずりこんでしまう。谷間の奥底にたまっていたフェロモンも嗅がされて、レッドの頭が完全に麻痺してしまった。

「ふふっ、レッドさんの体、ビクビク痙攣してきましたね」

「むうううううッ！」

「全身の力が脱力して、もう抵抗しようという気持ちすら溶けてしまったことが分かります」

「んっっむううッ！」

「弟みたいでかわいいです。そうだ、レッ

ドさんにも、弟にやってることと同じことしてあげますね」

顔を見せてください。

そう言って詩織がレッドの頭部をおっぱいから引き抜く。現れたのはとろけきったアへ顔を浮かべた男だった。おっぱいから解放されたのに、逃げることも、戦うこともせずに、レッドは少女の鑑賞物になってしまっていた。

「ふふっ、かわいい」

「あひい……ひいい……」

「おっぱいに負けちゃいましたね」

「ひいい」

「もっときもちよくしてあげます」

詩織が動く。

レッドの背後にまわって、その背中に自慢のおっぱいを押しつける。ぐんにやりと潰れたおっぱいの感触でレッドがアヒンと悶えたのも束の間、詩織の手がレッドの乳首をいじった。

「ひいひいひいんッ！」

戦隊スーツの上から乳首をいじられる。少女の小さな手がレッドの乳首をカリカリとひっかいていく。はじめての感触にレッドが困惑し始めた。

(な、なんだこれ)

レッドにとって始めての感覚。

彼はこれまで乳首をいじったことなどなかった。当然だ。そんなの硬派な男がすることではない。男が乳首で快感を感じるなんて、そんな情けないことできるはずがなかった。それなのに、

(き、きもちひいひいッ！)

すぐに快感が全身に伝わってしまう。

胸の奥からジンジンと響き出した疼きが強くなっていく。カリカリと容赦のない乳首責めが終わらない。人差し指でカリカリされているだけ。それなのに、レッドの体はビクビク震え、そしてついに限界を迎え

てしまった。

「アッヒイイインッ！」

ビクッ！

ビクビクッ！

快樂が爆発して体が跳ねていく。これまでの人生で感じたこともない絶頂。その正体がなんなのか分からなくて、レッドは困惑しながら、ビクンビクンと痙攣を続けていた。

「上手にメスイキできましたね」

レッドの背後から詩織が囁く。

「め、めしゅいき？」

「そうですね。レッドさんは乳首をいじめられて、メスの絶頂で体を痙攣させてしまったんです」

「しょ、しょんなああ」

「ふふっ、体に力が入らないですよね？」

メスイキして体が屈服してしまいました。脱力して、トロンと溶けた瞳でウルウル涙目になってしまっています。本当に、弟みたいでかわいいです」

かりかりッ！

メスイキ絶頂の余韻に浸っているレッドの乳首に追い打ちをかける詩織。彼女の指

が少し動くだけで、レッドの体が面白いように痙攣していった。

「わたしコレ得意なんですよ。弟が反抗的な態度になった時にはいつもこれをやってあげています。すぐにメスイキして「ごめんなさい」するのを見るのが好きなんですよね。最近は従順になってつまらないので、少しでも服装が乱れたりしていたら言いがかりをつけてメスイキ地獄でかわいがってあげてます。それで「ごめんなさい」させると、すごくかわいい反応になるんですよ」

カリカリカリッ！

さらに詩織の指が蠢く。開発されていない

かった男の乳首を一瞬にして性感帯に変えてしまうほどの卓越した乳首責め。レッドは体を痙攣させながら、口を半開きにして脱力しきってしまった。

(こ、こんな……こんなことで……)

こんなことで負けるのか。

レッドの心に屈辱が刻まれていく。おっぱいでメロメロにされ、乳首をいじられて屈辱する。

男なのに……。

自分は強いはずの男なのに、乳首をいじられただけで力が入らない。怒りの力をパワーに変えようとしてもすぐにカリカリで脱力してしまう。半開きになった口からは

ダラダラと涎が漏れていった。

「レッドさんも、「ごめんなさい」しまし  
うか」

詩織が乳首責めを続けながらニッコリ笑  
って言う。

「ごめんなさいって、謝ってください」  
「な、なんへえええッ！」  
「そうですなえ……あ、ほら、レッドさん  
は世界を守るための正義の味方なんですよ  
ね？ それなのに魔王軍に雇われたアルバ  
イトに手も足も出ないで完敗してしまっ  
ています。それを謝りましょう」

ニコニコ笑いながら、少女がいちゃもん  
をつけていく。

「ほら、謝ってください」

「あひい……ひいん……」

「全世界のみなさんに、敵に負けて気持ち  
よくなってること謝るんです」

乳首責めが終わらない。

けれどそんな謝罪なんてするつもりもな  
かった。久しぶりにレッドの精神に怒りが  
点火して、体に力がみなぎってくる。

「ふ、ふざけるな」

「ん？」

「だ、誰がそんなアッヒンンッ！」

カリカリカリッ！

手加減なしの本気の乳首責め。

それがレッドに炸裂し、抗議の言葉も、せっかく点火したはずの怒りのパワーも一瞬にしてすべて奪い取られてしまった。

「聞き分けが悪いと、本気でやりますよ？」

「あひいひいッ！」

「わたしまだ手加減していません。本気でやるとレッドさんなんてすぐに発狂してしまうでしょうから、加減して乳首責めしてあげているんです」

これで手加減している。

その言葉にレッドの心が完全に墜ちる。一瞬だけ加えられた本気の乳首責めだけでダメになる。あああうと悶えるだけになったレッドの耳元で少女が囁いた。

「ごめんなさいしないなら、本気の乳首責めです」

「ひいんんッ！」

「弟の頭バグらせて壊してしまった恐ろしい乳首責めで、レッドさんの乳首をめちゃくちゃに犯してしまいます」

かりかり。

詩織の指が脅迫するように乳首をひっかいて、レッドの体がビクンッと痙攣した。

「それがイヤなら謝ってください」

「ひいんッ！」

「敵に負けてごめんなさいって謝るんです」

「あああッ！」

「ほら、はやく」

かりかりッ！

乳首責めが続く。詩織はにっこりと笑ったままだ。それに対してレッドは顔面をグジャグジャにして、屈辱と興奮と恐怖で壊れそうになっていた。

「5」

詩織がカウントを始めてしまう。

その人差し指が乳首ギリギリで待機を始

めていた。

「4」

「ひいんッ！」

「3」

「らめええッ！ ひやめでええッ！」

「2」

「ゆるじでええ！ ゆるじでください」

「1」

「あひいんッ！」

一瞬の静寂。

そしてついに、

「ご、ごめんなさいいひいんッ！」

言った。

その瞬間、レッドの体がビグビグンッと  
痙攣した。

(な、なんへええええッ！)

まだ言葉責めをされただけ。

乳首はいじられていないのに、なぜか体が快感で震えてしまったのだ。それが何故なのか分からず、自分の体が自分のものではないという感覚で悶え苦しんでいく。

「もっとです」

「あひッ！」

「もっと、ごめんなさいしてください？」

乳首ギリギリの虚空で詩織の指がカリカリを始めてしまう。それに脅されたレッドの口から絶叫がほとぼりした。

「ご、ごめんなさいいいいいッ！」

「もっと」

「ごめんなさいいいいいッ！ ごめんなさいいいいいッ！」

ビグビグンッ！

叫べば叫ぶほどに絶頂した。

それと同時に力がわいてくるのが分かる。魔力がたまっていくのだ。それが分かった。

(なんで……どうして……)

怒りを感じていないのに魔力がたまっている。

怒りのパワーで魔力がたまるというレッドの特異体質が明らかに変わっている。けれどそれが何故なのか分からず、レッドはひたすらに「ごめんなさい」をして、体を痙攣させていった。

「ふふっ、かわいい」

詩織がそんなレッドのことを鑑賞しながら笑った。

「いじわるしてごめんなさい。でも、ごめんなさいするレッドさん、とってもステキ

でしたよ？」

「ひいひいッ！ ひいひいひいッ！」

「弟はもう従順になってしまつてつまらないんですが、レッドさんは最後まで屈辱感を忘れずに「ごめんなさい」してくれただ、とってもかわいかったです。わたしも満足できました」

にっこりと笑う。

その笑顔がとにかく恐ろしかった。

「それに、レッドさんの魔力……」

詩織が意味深につぶやく。

「レッドさんって……ううん、男の人って、

ひょっとして……」

じいっとピクピク痙攣していくレッドを見つめる。ごめんなさいをした途端に増した魔力に気づいた少女が何かに気づいた様子でレッドを鑑賞していく。けれどその口からそれ以上のつぶやきが漏れることはなかった。

「うん。さすがに今日はかわいそうですね」

「あひんッ！」

「それでは、残り時間ずっと乳首責めしてあげます。その間レッドさんは「ごめんなさい」を続けてください。少しでも「ごめんなさい」が遅くなったら本気の乳首責めですからね」

カリッ！

分からせるように一撃だけ本気の乳首責めが炸裂する。痙攣したレッドがすぐに「ごめんなさいいいッ！」と絶叫した。

「ふふっ、本当にいいバイトですね、これ」

にっこりと笑った詩織が、レッドの乳首に狙いを定めて、

「趣味と実益がかなってこれ以上ないアルバイトです。すぐ終わらないように、じっくり時間をかけて仕事をしましょう」

カリカリッ！

そして始まってしまおう。

レッドの悲鳴と「ごめんなさい」が永遠と響き続けていった。

＊

「ん、3時間たちましたね」

詩織がスマホの画面を見て言った。

深夜の公園。その間、ずっと人は現れなかった。街灯に照らされてスポットライトになった広場で、少女がレッドの背後から永遠と乳首責めをしていたのだ。

「あひい……ひいん……」

レッドは息も絶え絶えだった。

右の黒目がほとんど残っていない。

半開きになった口からは少し舌まで出ている。完全に脱力していて、人間の意思というものがまるで感じられないほどに壊されてしまっていた。しかし、その命があることは、ときおり「ごめ……な……じゃい」とつぶやくことで知れる。レッドは乳首責めが終わっても、まだ「ごめんなさい」をしているのだった。

「ふふっ、ありがとうございます、レッドさん」

詩織がレッドの背後から言う。

「レッドさんのおかげで3時間のアルバイトができました。今日だけで4500円も稼げたことになります」

ニコニコしながらの言葉。

しかし、その数字にレッドは訳が分からなくなった。

（4500円って……そんな安いバイト代で）

時給に換算すれば1500円だ。

命をかけたアルバイトなのにその金額と  
いうのあまりにも安すぎる気がした。

詩織がそこまでお金を稼ぎたいという理由も分からなかった。遊び歩いているよう

にも見えないし、何にお金を使っているのだろう。乳首責めでとろけた頭で、アヒアヒ言いながらレッドがそんなことを思う。

「な、なんで？」

だからレッドが質問していた。

それは彼女と最初に出会った時から胸に抱いていた疑問だった。

「なんで、そ、そんなバイトなんかするんだ？」

「え？」

「バイトならほかにもあるだろ？ こんな危険なバイトなんて……なんのために？」

率直な質問に、詩織が一瞬黙る。

彼女は「誰にも言わないでくださいね」と前置きしてから言った。

「わたしの実家、お豆腐屋さんなんです」

背後からレッドの体を抱きしめながら、

「時代なのかあまり繁盛していなくて、経済的に苦しいのが分かるんですよ。ご飯とかも、毎食豆腐かおけらが出てきますし。もちろん両親は優しくてなんの不満もないんですが、でも、弟のためにお金を稼いでおいてあげたいんです」

詩織が姉の顔つきになって、

「弟は大学に行ってもらいたいなって思ってます。だから、そのためにお金を貯めておかないといけません。時給が1500円なんて、高校生にとっては破格なんです。だから、がんばりたいんですよ」

静まりかえる。

レッドにとっても詩織の言葉は予想外だった。弟のため。それはレッドも同じだった。病弱な妹のために戦っている。世界の命運とか、人類のためというよりは、愛する家族のために戦うというのが行動原理だった。その思いと同じものを詩織がかかえているということに、レッドの心が揺れてしまった。

「まあ、それに」

そんなレッドの心の隙間に、詩織の妖艶な声が染み渡った。

「このアルバイト、けっこう簡単ですからね」

「おっぱい見せただけで、みなさんすぐに負けてくれますから便利なんです。こんな簡単なお仕事でお金をもらうなんて、なんだか申し訳なくります」

くすくす笑いながら詩織の指先が一度、レッドの乳首をはねる。デコピンみたいな

一撃で、レッドの体がメスイキして痙攣した。

「ね？ とっても簡単です」

「あひい……ひいい……」

「それに、レッドさんたちの秘密も分かりましたし」

悶えるレッドのことを、背後からじいいっと鑑賞しながら、

「うまくやれば魔力もなくなるしないでしょから、このアルバイトまだまだ続けられそうです」

妖艶に笑った少女。

彼女がスマフォを操作して、カメラモードにする。そして、片手を伸ばして自撮りしようとして構えた。スマフォの画面には少女の笑顔と、アへ顔をさらしたレッドが映っている。

「だ、だめええええッ！」

また撮影されてしまう。

完敗してアへ顔をさらした姿を保存されてしまうのだ。そう思うと体が震え、なぜか魔力がわいてくるのが分かった。力がよみがえる。脱力していた体に鞭をうって脱出しようと、身構えた瞬間、

「はい、おとなしくしててください」

「あああああッ！」

背後からぎゅううううとおっぴいが押しつけられただけで終わった。力を入れようとしていた体が一瞬のうちにガクンと崩れる。下を向いてうなだれようとしていたレッドの髪の毛を少女が片手でわし掴みにして、ぐいっと上に持ち上げてしまった。

「ふふっ、すごい構図ですね」

「あひい……ひいひい……」

「髪の毛をつかまれて、顔を持ち上げられて、そのアへ顔がよく見えるようにされてしまっています」

意図的に煽るようにして少女が言う。

レッドの体がピクンピクンと痙攣して、絶望に染まった表情を浮かべていた。

「ほら、とっても簡単」

にっこりと笑った少女がカメラ目線になる。

そしてアへ顔を浮かべたレッドと一緒に記念撮影をした。カシャっという音がスマホから聞こえ、終わってしまった。

「うん、よく撮れてますね」

少女がスマホを確認して言う。

「レッドさんにも送ってあげますね」

詩織がレッドの体をまさぐってスマホを奪ってしまう。そのロックもレッドの指先を借りて簡単に解除してしまい、レッドのアドレスや個人情報をすべて奪ってしまった。

「あ、レッドさんたちのアジトってここだったんですね」

「や、やめろおおッ！」

「ふむふむ。かわいい妹さんですね」

「お、お前えええッ！」

「安心してください。危害なんてくわえませんし、魔王さんたちにも言いませんから。わたしの目的は、あった。これですね、みなさんのグループチャット」

戦隊全員で共有しているグループチャットだ。

詩織がチャットを操作して自分を招待してしまう。まんまとチャットグループに入った詩織が、慣れたようにスマホを操作して、写真を送ってきた。

「今さっき撮影した写真も送りますね」

「や、やめろおおッ！」

「この前撮影した写真も、はい、送りました」

「や、やめでええッ！」

「安心してください。レッドさんだけでなく、ほかのグリーンさんも、ブラックさんも、ブルーさんも、はい、みなさん仲良く

アへ顔を浮かべて昇天してる写真を送っておきましたよ」

詩織がレッドにスマホを返す。

ピコンピコンと連続して音が鳴り始める。写真を受信したのだ。送り主は「S I O R I」となっている。グループチャット上に大量の写真と動画がアップロードされている。そのすべてで、詩織が笑い、男たちがアへ顔を浮かべていた。

「これで、みなさんの魔力も回復するでしょうね」

にっこりと少女が笑っている。

「グリーンさんだけは絞りすぎて壊してしまったので無理でしょうが、ブラックスさんも、ブルーさんも、イエローさんも回復するはずです」

「な、なにを言ってる……」

「しっかり写真を見て、興奮してくださいね」

少女が立ち上がる。

レッドの体は脱力して動かない。

そんな情けない姿を一瞬見下ろして、少女が最後に一枚と、地面に倒れたレッドをスマホで撮影してしまった。

「ん、これじゃあ弱いですね」

撮影した写真を見て詩織が不満げな声を漏らす。

「ふふっ、こっちのほうが屈辱的ですかね」

少女が足を振り上げる。

すぐにローファアの靴底がレッドの顔面に炸裂した。制服のスカートから伸びるムチムチの脚。それがレッドの顔面を踏み潰してしまったのだ。

「はい、撮影」

そして撮影する。

カシャっという音をレッドは絶望しながら聞いた。すぐに自分のスマホからピコ

ンっという音が響いて、写真が受信されたことを知らされる。

「踏み潰された写真も送ってあげました」

「ひいひいッ！」

「レッドさんも、写真を見て魔力をためておいてくださいね」

にっこりと少女が笑って、

「今日も見逃してあげます。次に対戦する時までにしっかり興奮しておいてください」

じいっと少女の邪気のない瞳が地面に倒れるレッドを見下ろした。

「次戦うときも、レッドさんたちの魔力、わたしのおっぱいで根こそぎ奪ってあげますからね」

そう言って詩織が去っていく。

残されたのは脱力したレッドだけだった。怒りの力すらわいてこない負け犬の姿。それなのに、彼の体からは魔力がわいてくる。その正体分からず、レッドは悔し涙をこぼしながら、「うううッ」と嗚咽を漏らし続けた。



詩織との戦いから数日が過ぎていた。その間、レッドが夜の見回りをすること

はなかった。

魔力がほとんどなくなっており、詩織だけでなく、魔王軍の残党と出くわしても危険だったからだ。代わりにしていたことといえば、自分のスマホを眺めることだけ。スマホを眺めて、通知が来るのをそわそわしながら待ち続ける。そして、ピコンッという音に反応してすぐにアプリをひらくのだった。

「う」

声が漏れる。

グループチャットに新たな写真が投稿されていた。その写真を食い入るように見つめてしまう。

「で、でけええ」

おっばい。

スマホの画面には、アップで撮影された詩織の爆乳がうつっている。

ブラジャーも装着せず、手ブラの状態で撮影された写真の破壊力はすさまじかった。レッドの股間がすぐに勃起し、そして記憶がよみがえってしまう。

（このおっばいに完敗したんだ。手も足も出ずにトロトロにされて、乳首までいじられた……）

思い出すだけで体がピクンと痙攣した。

それと同時に体の底から魔力が生まれてくるのを感じた。ここ最近はこの繰り返しだ。詩織から写真が送られてきて、それを見ては勃起し、魔力が体の底からわきあがってくる。あれだけ搾りとられた魔力が少しづつ回復している。それは、グリーン以外のほかのメンバーも同じだった。

「みんな、すぐに既読がつく」

グループチャットで、詩織が投稿した写真には、戦隊の残りメンバーである3人分の既読がついていた。

みんなコレを見ているのだ。

そして、なぜか魔力を回復させてしまっている。詩織が語ったとおりになって、レッ

ドは訳が分からないまま、スマフォを凝視する。そしてまたピコンッと音が鳴って、写真が送られてくる。それだけでさきほどの疑問が消えて、レッドが詩織のおっぱいに夢中になってしまった。その時、

「お兄ちゃん？」

その声でピクンと震える。

部屋の入り口で、妹の比奈が心配そうにレッドを見つめていた。

「なにしてるの、お兄ちゃん」

「い、いや、なんでもないよ」

「……もうそろそろ、ミーティングの時間なんだけど、ほかのみんなも集まらないの。」

お兄ちゃんから号令をかけてもらってもいいかな」

病弱な妹に心配をかけている。

さきほどまでおっぱいの写真に夢中になっていたことが罪悪感となつて襲ってくる。けれどそんな罪悪感、比奈の胸を見ただけで霧散した。

(大きい)

あらためてそう思う。

まだ初等部なのに、比奈のおっぱいはデカかった。露出のない洋服でも隠せない巨乳。妹の胸のふくらみから目が離せなくなってしまう。

「お兄ちゃん？」

怪訝そうな声に反応してレッドが我にかえた。

「あ、ああ、わかったよ。準備があるから、先に行っておいてもらえるか？」

「……うん」

比奈が去っていく。

レッドは勃起した一物をなんとか静めようと必死だった。

そんな彼をあざ笑うかのように、ピコンツと音がして詩織から写真が送られてくる。見ちゃダメなのに見てしまう。そしてまた

勃起してしまうのだ。比奈のおっぱいまで  
脳裏に浮かんでしまい、勃起が収まるまで  
かなりの時間が必要になった。

＊

戦隊基地のメインルームには回復した仲間たちの姿があった。

少し非道な所もある一匹狼のブラック。  
知的で優しい糸目を浮かべたブルー。  
人好きのする後輩キャラのイエロー。  
意識不明の重体が続くグリーン以外のメンバーが魔力を回復させた状態で勢揃いしていた。

「対策をねる必要がある」

レッドが言った。

対策——それは詩織への対策に他ならなかった。

「でも、どうやって戦えばいいんツスカ？  
あの子……俺たちの魔力も吸収して、ますます強くなってるツス」

イエローが言う。

その言葉に戦隊メンバーたちがうなだれてしまった。

「よろしいですか？」

優しそうな笑顔を浮かべながらブルーが

声をあげた。

音大で声楽をやっているだけあって、その声には人を安心させる力があつた。

「これまで、我々は彼女に各個撃破されてきました。なので、策としては単独行動は控えたほうがいいかと」

「全員で戦えば、勝機はある、か」

「ええ。それしかないでしょう」

レッドは押し黙った。

ちらりと、ブラックのほうを向く。

「ブラック、それでもいいか？」

独断専行しかしてこなかったブラックに

問いかける。

集団行動を好まず常に一人で戦ってきた一匹狼。それが許されてきたのは確かな実力があるからだ。そんな冷酷無比な戦闘マシーンの回答をほかの戦隊メンバーも固唾をのんで見守っていた。

「……仕方ないだろう」

影のある男がつぶやく。

「あいつを倒すまでの話した。それまで単独行動は控えよう」

「決まりだな」

方向性が決まった。

あとは実行あるのみだ。

夜の町を4人の戦隊メンバーが連なっていて行く。

この4人ならば勝てる。これまでは一人づつ戦って負けてきたが、戦隊メンバー全員で戦えば勝利は確実だった。そんなふうを考えていたレッドたちは、すぐに地獄に叩き落とされることになる。

＊

「はーい、おっぱいに完全敗北でーす」

嬉しそうに詩織が言った。

言葉どおり。制服姿の少女の足下には、4人の男たちがアヒアヒ言いながら倒れて

しまっていた。

(こ、こんなはずじゃ)

レッドが焦りながら思う。

既にスーツ姿に変身して臨戦対戦はぼっちりだったはずだ。油断もなかった。深夜の町をパトロールしていたところ路地裏に彼女が現れて、すぐに戦いが始まった。4人全員で一人の少女に攻撃をしかけたのだ。それなのに、

「ふふっ、はい」

ぼろんッ！

「「「ひいひいひいひいひい」」」

制服のシャツがはずれ、おっぱいが現れる。

ブラジャー姿になった敵のおっぱいは明らかに大きくなっていて、その視覚情報だけでレッドたちの脚が止まってしまった。

「こちらからも攻撃しますね？」

詩織が宣告する。

始まったのは、おふざけみたいな攻撃だった。

おっぱいを凝視したまま茫然自失としている男たちの体に、ぐんにやりとおっぱいを押しつける。ただそれだけ。殴ったり蹴っ

たりなんてせずに、少女が自慢の爆乳を男の体に押しつけるだけで勝負は終わってしまった。

「あひいひいんんッ！」

ガクガクガクッ！

男たちは例外なく脱力してガクガクと痙攣を始めた。おっぱいの柔らかさの前に腰が抜け、すべての戦意が碎け散ってしまう。一人残らず膝から崩れた男たちが、低身長少女を見上げて、アへ顔を浮かべていた。

(こ、こんなはずじゃなかったのに)

レッドが呆然としながら思う。

体にまったく力が入らなかった。おっぱいを見せつけられ、おっぱいを押しつけられただけで体が屈服してしまった。

「ううううッ！」

さらに周囲を見渡してみれば、アへ顔を浮かべて、うめき声をあげる仲間たちがいた。

爽やかな音大生も、人なつっこい後輩も、そして孤高の影のある男も、少女のおっぱいを見上げて凝視していた。フェイスガード越しでも分かるところけきた顔。おっぱいに完全敗北してしまっている。それが分かった。

「フェイスガードが邪魔ですね。少し吸収します」

そう言って詩織がレッドの頭部をがしつと掴んだ。

なにをされるか分かったレッドが逃げようとするのだが、目の前に迫った爆乳の光景で身がすぐんでしまった。肉食動物を前にした草食動物のように体が動かなくなってしまったレッドの視界に、大迫力の爆乳が迫り、捕食された。

「はい、ぎゅううううッ！」

「むううううッ！」

パフパフ。

「Lカップおっぱいの柔らかな谷間に頭部全体を挟み込まれてしまう。レッドの後頭部にまわされた詩織の両手が、情け容赦なくレッドの顔面を乳肉地獄に押し込んでいた。レッドの体がビクンビクンと痙攣していく。

(ぎ、ぎもじいいいッ！)

脳裏にはおっぱいの感触だけ。

柔らかくて、張りのあるおっぱい様に悶絶狂い、防御力がゼロになってしまう。匂いを嗅ぐとフェロモンで頭を壊される。すぐにレッドの体がダランと脱力して、びくびく痙攣するだけになった。

「吸収開始です」

キュインンンッ！

レッドの体が赤く明滅して、その光が詩織のおっぱいに吸収されていく。魔力が奪われているのだ。それなのにレッドは性的快感でピクピク跳ねるだけ。泰然自若としてニッコリと笑う少女が、おっぱいだけで成人男性を圧倒していく。

「はい、フェイスガードが維持できなくなるくらいに手加減して、魔力を吸収しました」

詩織がレッドの顔面だけをおっぱいから解放してやる。

現れたのは素肌をさらしたレッドの顔面だった。はやくも白目をむいて、半開きになった口から涎を垂らしながら悶える男がそこにはいた。

「いい顔になりましたね、レッドさん」

「あひん……ひい……」

「ふふっ、ほかの方たちにも同じことをしますね。見ていてください」

詩織が繰り返していく。

少女の大迫力の爆乳を見つめたただけで服し、無条件降伏してしまった男たちを一人づつ血祭りにあげていく。

男たちの顔面をおっぱいで捕食し、フェイスガードがたもてなくなる程度に魔力を

吸収してしまう。上品なブルーも、愛くるしいイエローも、そして硬派なブラックまでもが、詩織のLカップおっぱいの餌食になって、アへ顔をさらしてしまった。

「ふふっ、順調に魔力もたまっていきますね」

魔力を吸収した詩織がニッコリと笑いながら言う。

「仕上げをしましょう」

「ひい……あひ……」

「みなさんには、もっと魔力をためてもらいますね」

「ひい……ああん……」

「誰にしましょうか」

詩織が「うゝん」と悩む。

そして、人差し指で一人づつを指さしながら、「ど・れ・に・し・よ・う・か・な」と始めてしまう。「天の神様の言うとおり」、とつぶやき終わった時、詩織に指をさされていたのはブルーだった。

「うん。それではブルーさんを調教しますね」

死刑宣告。

絶望の表情を浮かべたブルーをてきぱきと調理してしまう。

逃げ出そうとしても、おっぱいで腰を抜かした男の抵抗なんて動きがのろいカメミ

たいなものだった。あつという間にブルーの背後にまわった詩織が、ぎゅううっと抱きしめてアへ顔男を羽交い締めにしてしまう。そのまま地面に座り、スカートから伸びる自分の脚をブルーの脚に絡ませて逃げられないようにする。そして、詩織の両手がブルーの胸板に伸ばされた。

「乳首責め、いきます♪」

カリカリカリッ！

「いっぎいいいいッ！」

少女の人差し指がブルーの乳首をひっかく。

たったそれだけでブルーの体は面白いように痙攣した。背後から少女の体によって磔にされた男が、乳首をカリカリされただけで断末魔の悲鳴をあげていた。

「きもちいいでしょ？」

「あひいいいいッ！」

「レッドさんには言いましたけど、わたし得意なんです。反抗期になった弟のこともこれで骨抜きにしてあげました。おっぱいを押しつけながらやると効果的で、すぐに防御力がゼロになってしまふんですよ。その状態で乳首をいじめると、すごい快感を与えることができます」

カリカリカリッ！

詩織の指が躍動する。

効果は抜群で、ブルーがトロトロに溶けたアへ顔を浮かべて完全に脱力してしまった。その口から、「あ、あ、あ」と甘い声が漏れ始める。

「いい鳴き声です」

「あ、あ、あ、あ」

「確かブルーさんは音大に通ってるんだね。だから喘ぎ声も良くて心地良いです」  
にっこりと笑った少女が残酷に、

「それでは、マゾ楽器にしてあげますね」

カリカリカリッ！

「あひいんんッ！」

詩織の指使いが変わる。

これまで手加減してきたのだ。彼女の指がブルーの乳首の奥底に眠っていた快感ポイントを重点的に責めていくのが分かる。その快感の衝撃がすさまじいことは、ブルーの体が電気ショックでもくらったみたいに痙攣しているのを見れば分かった。アへ顔を浮かべ、ついには白目になった男が、乳首の快感で死にそうになっている。

「こうして、まずは本気乳首責めで自我を破壊します」

「あひいひいひいッ！」

「こうすれば効率的にマゾ楽器にできるんですよね。弟で実証済みなので、間違いないです。自分が人間であることすら忘れさせて、頭をバグらせちゃう。それが効率的に男性をマゾ楽器にするコツなんです」

詩織がレッドたちに説明していく。

その間もブルーに対する本気の乳首責めは継続。レッドたちの前で、仲間の一人が乳首責めで壊されていく。

「うん、ころあいですね」

詩織が言った。

「演奏開始です♪」

カリッ、カリッ、カリッ。

一定のリズムを刻んで詩織の人差し指が動き出した。ただ人差し指を動かして、乳首を一定間隔でカリカリしていくだけ。単調な動き。けれど効果は絶大だった。

「アッ♡ アッ♡ アッ♡」

ブルーの口から甘い声が漏れ始めた。

声は詩織の指使いにあわせてあがった。

人差し指が乳首をひっかくと喘ぎ声があがるのだ。それはまさしく演奏だった。

「はい、マゾ楽器の完成です」

「アッ♡ アッ♡ アッ♡」

「とってもいい音色ですね」

「アッ♡ アッ♡ アッ♡」

「ね、みなさんもそう思いませんか？」

にっこりと笑って詩織が問いかけてくる。彼女の視線を受けたレッドたちは、「う」と呻くしかなかった。

（ブルーの奴、あんなに気持ちよさそうにして）

ブルーの顔に苦痛の表情は一切浮かんでいなかった。

さきほどまでの苦痛に悶えた顔ではなく、トロトロに溶けた幸せそうな顔。そんな無

防備な表情をさらして、詩織の指が動くたびに甘く「アッ♡」と喘ぐ。その様子を見ていると、レッドの股間がイヤでも反応してしまった。

(な、なんで)

目の前で仲間が犯されている。

背後から抱きしめられ、羽交い締めにされて、乳首をカリカリされてしまっているのだ。助けないといけない。それなのに動けない。ブルーが犯され、甘い喘ぎ声を聞いているだけで、頭が麻痺してしまっただけ、しかも、

(ぼ、勃起しちゃダメなのに)

勃起している。

仲間が犯されているのを見て興奮しているのだ。それと同時に魔力がわきあがってきていた。さきほど詩織に吸収された魔力がすぐに回復している。怒りをパワーに変えたわけではないことはレッドが一番分かっていた。いったい、自分の体はどうなってしまったのだろうか。

「ふふっ、不思議そうな顔してますね、レッドさん」

詩織がブルーの演奏を続けながら話しかけてくる。

「魔力、回復したんでしょ？」

「くっ」

「不思議ですよ。目の前で仲間が犯されてアンアン喘いでマゾ楽器にされているのを見て、なぜか興奮しちゃう。そして魔力も回復してしまう。それがなぜなのか分からなくて混乱しているんですよ」

教えてあげます。

詩織が笑って、

「男性は、マゾ快感で悶えると、魔力を生み出すんです」

「は？」

「被虐の快感で頭をバカにしてみましたら魔力が生まれるんですよ。こんなふうには」

カリッ、カリッ、カリッ。

「アンッ♡ アンッ♡ アンッ♡」

乳首責めがさらに増してマゾ楽器が悶える。

さらに甲高く音程を調整されて演奏されている。

そのブルーの体が青く明滅していた。それは魔力が生まれている証拠に他ならなかった。

「ね？ ブルーさんったら、乳首責めでマゾ楽器にされて、マゾの快感に浸って、魔力を生み出してしまっています」

「そ、そんな」

「大発見ですよ。魔王さんたちもこのことには気づいていないみたいなんです。この前、レッドさんと戦った時に、偶然分かったことなんですよ、これ」

カリカリカリッ！

乳首責めが継続される。ブルーがさらに喘ぐ。それを見せつけられて、確かに自分の体の奥底から魔力がみなぎってくるのが分かった。自分の体が赤く明滅して、魔力が溜まっていく。

「う、嘘だ」

信じられない。

信じたくない。レッドが絶望の表情を浮かべて詩織を見つめる。しかし、その絶望すら被虐の快感になってしまふ。レッドの魔力がさらに増大し、それを見た詩織が「くすり」と笑った。

「レッドさんだけじゃありませんよ？ ほら、見てください。ほかのお仲間さんたちを」

詩織の言葉に反応してレッドが後ろを振り向く。

そこには、同じくアへ顔を浮かべて、それぞれの色で明滅するブラックとイエローの姿があった。

「ううううッ！」

「しゅ、しゅごいっす！」

もはや二人に理性はなかった。

目の前の詩織と、乳首責めされて悶えるブルーに意識のすべてを持っていかれていく。自分が責められているわけではないのに、被虐の快感で悶えて、魔力を生み出してしまっているのだ。そこに、戦隊員としてのブライドなんてどこにもなかった。

「見ているだけでマゾの快感で悶えちゃう」

「あひっす！」

「マゾで気持ちよくなつて魔力をつくりだす」

「ひっす！」

「便利でいいですね、レッドさんたちって」

くすりと笑った。

詩織の顔には嗜虐的な笑みが浮かんでいた。

明らかにレッドたちを下に見て、バカにした笑顔だ。それは一瞬のうちになくなり、いつもの優しそうな笑顔になるのだが、彼女の本能の中にあるサディストの片鱗に触れたレッドたちは、さらにマゾ性癖を刺激されて悶えてしまうのだった。

「ふふっ、ブルーさんったら、魔力が完全に回復しそうですね」

マゾ楽器を演奏しながら詩織が言う。

「あれだけ吸収したのに、もう魔力がいっぱいに充填されました」

「アッ♡ アッ♡ アッ♡」

「まあ無駄なんですけどね」

詩織が笑った。

そして喰らった。

肉食動物が獲物に襲いかかる俊敏さで、巨大乳房がブルーの顔面を捕食してしまっ

た。  
「むうううううッ！」

おっぱいの谷間に生き埋めになったブルーが呻いている。自分の頭部よりもデカ

い乳房二つに挟まれてしまい、ブルーに生存の道が残されていないことは明らかだった。

「吸収開始♪」

キュイイインンッ！

すぐに詩織がブルーから魔力を吸収し始める。

明滅した青色の光が、勢いよく詩織のおっぱいに吸収され、奪われていく。

「ふふっ、せっかく魔力を溜めたのに、残念でしたね」

ぐりぐりと乱暴にブルーの顔面をおっぱいで潰しながら詩織が言う。

「魔力を溜めて、わたしと戦おうとしていたのに、逆に奪われてしまいました。かわいそう。ブルーさんも、レッドさんたちも、みんな、わたしに魔力を提供するためだけに生きてるみたいですね」

くすりと詩織が笑った。

その顔には妖艶な笑顔が浮かんでいた。

「はい、吸収完了です」

詩織がブルーの顔面をおっぱいから引き抜いてやった。

現れたのは土色に変色した老人のような男だ。戦隊スーツも維持できず、全裸になった男の体も、同じように萎んでしまっていた。

「ふふっ、少し搾りとり過ぎてしまったみたいですね。魔力以外の生命力も、おっぱいで吸収してしまいました」

詩織がブルーの髪の毛をわし掴みにして持ち上げ、鑑賞しながら言う。

そんな乱暴なことをされているのに、亡骸みたいになったブルーはアヒアヒと悶えるだけだった。

「まあ、マゾ性癖を刺激すれば、すぐに回

復するんですけどね」

にっこり笑って、少女がブルーの髪の毛を放す。

自分で立つこともできなかった男が地面に仰向けで倒れて、ビクンビクンと痙攣していく。そんな男の顔面めがけて、詩織のローファアの靴底が炸裂した。

「むうううううッ！」

踏み潰されてブルーが悶える。

年端もいかない少女の、制服のスカートから伸びるムチムチした太ももに筋肉の筋が浮かびあがっている。そんな魅惑的な脚で踏み潰され、屈辱と苦痛を感じるはずの

男の体が、青く明滅し始めた。

「はい、マゾ性癖を刺激されて魔力をつくりだしましたね」

詩織がぐりぐりとブルーの顔面を踏み潰しながら言う。

「これならすぐに魔力を回復できそうです」

「むうううううッ！」

「まあ、回復してもすぐにおっぱいで奪ってしまおうんですけど」

くすりと、バカにしたように詩織が笑って、

「男性のマゾ性癖を刺激するのなんて簡単ですね。弟をかわいがっていた頃から思っていたんですが、男性ってみなさん心の奥底ではマゾなんじゃないですか？ いじめられて悦ぶ変態。ふふっ、正直幻滅ですね」

笑った少女が踏み潰しを継続しながら、チラリと視線を横にやった。

そこには、仲間が踏み潰されるのを見ながら、一步も動けず、ハアハアと息を荒くしているレッドたちがいた。例外なく全員、その体をそれぞれのカラーで光らせている。

「ほくら、簡単」

「あひんんッ！」

「仲間がいじめられているのを見て、マゾ

の快感で興奮して、魔力をつくってしまっていますね」

「ひいひいッ！」

「ふふっ、順番にこのおっぱいで吸収してあげますからね。その間、ほかの仲間がボコられていくのを見て、勝手に興奮してください」

踏み潰しが終わる。

少女が近づいてくる。

そして、レッドの目の前でぴたっと止まった。

「まずはあなたですよ、レッドさん」

「ひいひいッ！」

「ブルーさんと同じようにマゾ楽器にして、

演奏してから、奪ってあげます」

「あああああッ！」

レッドが悶える。

逃げることもできない。目の前の威圧的なおっぱい様に対する恐怖と興奮で一步も動けない。少女の爆乳から目が離せなくなっ  
てしまっている。そんな情けない自分を自  
覚してマゾイキし、レッドの体がさらに明  
滅していく。

(こ、こんな女に……俺たちは……)

絶望の表情を浮かべてレッドが悶える。

屈辱感でマゾ性癖が刺激され、何もさ  
れていないのに魔力を生み出していく。

それを見て、詩織が「ふっ」と鼻で笑っ  
た。

「本当にマゾって便利ですね」

「あひいひいッ！」

「これなら、マゾ楽器にしなくても十分そ  
うです」

「ひゃ、ひゃめでええッ！」

「はい、ぱっくん」

抵抗すらできなかった。

レッドの頭部が詩織のLカップおっぱい  
に捕食されてしまう。さらに大きくなった  
乳房で完全に生き埋めとなり、首無し死体  
ができあがった。

「むううううううッ！」

レッドの体がビクンビクンと跳ねる。

顔面に伝わってくるおっぱいの柔らかさ  
でレッドが悶絶する。感触だけでもダメな  
のに息を吸えば凶悪フェロモンで自由意志  
も奪われてしまう。怒りも抵抗心もドロド  
ロに溶かされたレッドが、完全脱力してさ  
れるがままになってしまった。

「吸収開始♪」

にっこりと笑った詩織が捕食していく。

レッドの体が赤く明滅し、それがおっぱ  
いに吸収されていく。すべて搾りとられる  
まで、そう長くはかからなかった。

\*

「ふふっ、あっけなかったですね」

少女が仁王立ちしながら怪しく笑う。

その足下には、萎んでしまった男たちが、  
ピクピクと痙攣するだけになっていた。レッ  
ドも、ブルーも、ブラックも、イエローも。  
全員例外なく、魔力を完全に搾りとられて  
しまったのだ。

(こ、こんなはずじゃ)

レッドが地面に倒れ少女を見上げながら  
思う。

こんなはずじゃなかった。戦隊全員で挑めば必ず勝てるはずだった。こんな年下のアルバイトごときに負ける自分たちではない。魔王軍を壊滅一步手前まで追い込んだ俺たち全員の力をあわせれば、必ずこいつに勝てる。そう思っていたのに、

(手も足も出なかった)

少女のおっぱいに完敗してしまった。

今もただけた制服からポロンとこぼれてしまっている爆乳。その肌の暴力を視界におさめただけでビクンと体が痙攣してしまふ。そして、体の底から魔力が生まれ、体が明滅するのを感じた。

(なんで……なんでこんなことで魔力が……)

ほかのブラックたちも同じだ。

ピクピク震えながら少女を見上げ、魔力をつくりだしてしまっている。少女が語ったこと——マゾ性癖を刺激されると魔力を生み出す。それが真実であることが分からされてしまふ。

「ふふっ、みなさんまた魔力をつくり出しましたね」

男たちの魔力製造工程を見下ろしながら詩織が続けた。

「実は魔王さんと交渉して、みなさんから

吸収した魔力に応じて報酬を受け取れるようになったんです。1立方メートルあたり100円なんです。これがけっこうな報酬になるんですよ」

100円。

俺たちの魔力の価値が100円。そんなはした金のために魔力を奪われている。缶ジュースも購入できない価格で自分たちの魔力が取引されているのだ。まさにとるに足らない存在。自分たちの価値が貶められている。そう思うと屈辱でレッドたちの体がビクンと震えた。そして——さらに魔力を作り出してしまおう。

「ふふっ、本当に便利」

詩織が妖艶に笑った。

「証拠写真も残しておきますね。みなさんのことをここまで追い込んだという証拠を撮影します」

にっこり笑った姿は普通のJKだ。友達と談笑しながら記念撮影をしようとしている。しかし普通のJKとは違い、彼女はミイラのように萎んだ男たちの髪の毛を片手でつかんで持ち上げ、頬と頬をくっつけて自撮りを始めてしまった。

「はい、チーズ」

カシャッ！

まずブルーが撮影される。

ブラックも、イエローも。仲間たちが荷物みたいに扱われて、抵抗もできずに持ち上げられ、自撮り写真の餌食になっていく。にっこりした笑顔の詩織と、魔力を吸収されシワシワになって苦悶する男たちの顔が写真となって固定化されていく。

「最後はレッドさんですね」

そして仕上げが始まる。

詩織が同じようにレッドの髪の毛を片手でつかんで、持ち上げる。ひょいっと、軽い荷物を扱うように。体重すら魔力となって吸収されてしまった男を扱うのは簡単ら

しい。詩織がニンマリ笑った。

「軽〜い」

「あひんッ！」

「レッドさんも吸収されちゃいましたね」

「ひいひいッ！ ひいひいッ！」

「魔王さんたちが恐れていた最強の戦士も、わたしのおっぱいにかかればこのザマ。魔力をせんぶおっぱいで吸収されて、軽い荷物みたいに扱われてしまっています」

詩織がレッドを真正面から鑑賞しながら言う。

じいひいっと穴があくほど凝視されて、耐えきれずレッドが視線をそらした。

宙ぶり状態のままうなだれてしまった男

と、

そんな負け犬を勝ち誇った笑顔で鑑賞したままの少女。

どちらが【上】で、どちらが【下】なのか

——一目瞭然の光景だった。

「写真撮りますね」

詩織が自分の顔をレッドの顔に近づけ、スマホを持った手を伸ばしながら言う。

さらには、

「笑ってください、レッドさん」

「ひいッ！」

「ほら、記念撮影なんだから笑わないと。一緒に笑顔で撮影しましょうよ」

にっこりと笑顔の少女が、レッドの髪の毛を片手で掴んで持ち上げながら、お前の

感情を差し出せと命令する。

怯え狂った男が、体を強く明滅させていった。

「ふふっ」

確信した詩織が、一言、

「笑え」

「ひいッ！」

「わ・ら・え」

「あひいッ！」

耐えられるわけがなかった。

絶望と恐怖の中でレッドが笑った。

それはみすばらしい笑顔だった。シワシワになった顔で、眉は負け犬のように八の字になっていて、口角だけがあがってなんとか笑顔の表情になっている。自分の精神状態と違う表情を強制される。それだけでレッドの体がさらに光った。

「はい、チーズ」

カシャッ!

そして撮影される。

無常なシャッター音が響く。

詩織がスマホを確認して、にっこりと笑った。

「うん、よく撮れてますね」

「あひん……ひい……」

「ほらよく見てください。レッドさんったら、すごく情けない表情で写ってますよ」



詩織がレッドの眼前にスマフォの画面を  
向ける。

そこには怯えながらムリヤリ笑う男の姿  
があった。そんな自分の姿を客観的に見せ  
られて、今度こそレッドが深いマゾイキで  
痙攣してしまった。

「あひいんんんッ！」

ビクビクッ！

ビクンビクンッ！

体が明滅して、大量の魔力が生まれてい  
く。快感でレッドの脳がトボ。そんな様子  
を間近で詩織から鑑賞され、さらにレッド  
がマゾイキしていった。

「ふふっ、優秀ですね」

「ひいひいッ！」

「今日はこの辺にしておいてあげます。あ  
まり吸収し過ぎて壊れてしまっても困りま  
すからね」

ドサッ！

詩織が解放し、レッドの体が地面に転がっ  
た。ぴくぴくと痙攣しながら魔力を生み出  
し続ける男。そんな男の顔面に、詩織のロー  
ファアの靴底が炸裂した。

「ふふっ、グループチャットにみなさんの  
写真を送りますね」

レッドを踏み潰しながら詩織がスマフォを操作していく。すぐに、レッドたちの端末からピコンピコンと音が鳴り出した。

「写真を見て、マゾイキして、いっぱい魔力を溜めておいてください」

「あひい……ひいん……」

「次会ったとき、またこのおっぱいで搾りとってあげますから、ね？」

ぐりぐりッ！

最後に詩織がレッドの顔面を力強く踏み潰してから解放してやる。

さんざんに調教された男はもはや虚ろな表情を浮かべて、「うううッ」と呻くだけだった。そんな姿がツボだったのか、詩織がごく

自然とスマフォを向け、カシャッと撮影してしまう。そしてまたしてもレッドたちの端末からピコンという受信音が響くのだった。

「今日も魔王さんには、最後にみなさんが決死の力を振り絞って逃走したと報告しておきますね」

にっこりと笑って、

「やっぱり、このアルバイトは時給がいいですし、成功報酬も貰えるようになったので長く続けたいんです。これからもよろしくお願いしますね、みなさん」

深々とお辞儀をする。

そんな礼儀正しい少女の足下では、男たちが「アヒアヒ♡」悶えながら倒れていた。

「それでは失礼します」

詩織が去っていく。

その足取りは軽やかだった。

それとは反対に地面に倒れた男たちはうなだれて一步も動こうとしなかった。遊ばれ、魔力を奪われ、そしてアルバイトの継続というふざけた目的のために見逃された。そんな屈辱で傷つき、戦意を奮い立たせようと無駄な努力をしている。けれど、そんな男たちの体は、いつまでも明滅したままだった。